

六国史所見の天空事象記事

野口武司

一

周知のごとく律令政治展開の軌跡を誌しとどめる六国史には、各種各様の諸記事が収載されており、ここに取り上げる標題記事もその一つとして国史に彩りを添え、それをより豊かなものならしめている。いま、当該記事の内実を窺うに、それはそれでまさに百花繚乱の観を呈しているかに見える程の多種多様さをもっている。それ故に、その全てを抽出して明確な形を以て分類整理し、且つそこから何らかの事実を吸み分けるのは、かなり煩瑣にして難儀なことと言わねばならない。

本稿は、こうした難事に挑戦する一つの試みなのである。先ず当該関係諸記事を摘出して、これを便宜上、

A、雲気異変・異常記事（異光を含む、但し瑞雲は除く。）

E、月輪異変・異常記事

B、彗星記事

F、殞星・殞石記事

C、流星記事

G、異物降下・飛行記事

D、日輪異変・異常記事

H、虹霓記事

I、星辰異変・異常記事

J、二十八宿記事

K、星団・星群・星域記事

L、天空有声記事

M、日蝕記事

N、月蝕記事

のごとき任意の記事項目に分ちて整理するとともに、これら各類に所属する諸記事が六国史の各々に如何なる密度を以て載録されているか、詳言すれば、それら各類諸記事が各国史の一年当りに各々幾例づつ所見されるか、はたまた、それら各類諸記事の内容は如何なるものかを精査検討し、そしてこうした操作を通してそれら各国史に有する史書としての性格の一斑を闡明してみようと思う。

二

始めに、行論の便宜を考慮して、煩を厭わずに『日本書紀』以下、各国史所見の当該関係諸記事の全例を列記するとともに、これら各類諸記事の各国史における逐年毎の載録条数と、件の各類諸記事の各国史における一年当りの平均載録条数とが各々如何程になるか、そして、各国史所見の固有名星について、その一年当りの平均載録条数・事例数・種類数が各々如何程になるか、といった事柄をば一目瞭然たらしめる第一・二表、並びにそれら各類諸記事の、各国史における一年当りの平均載録事例条数の卓越順位を具体的史書名を以て示す第三表を掲記しておくこととする（当該関係諸記事の各事例（末尾には、その所在条）
閏月は○印を以て示した」と分類項目とを併記するとともに、各国史所見の固有名星について、その載録条数・事例数・種類数を各国史毎に掲記しておいた。）。

『日本書紀』

1 天有「赤氣」。長一丈餘。形似「雉尾」。（推古28・12・1

2 日有「蝕盡」之。（推古36・3・2条）……………M

条）……………A

3 長星見「南方」。時人曰「彗星」。（舒明6・8是月条）……………

…B

4 彗星廻見于東。(舒明7・1是月条) ……B

5 日蝕之。(舒明8・1・1条) ……M

6 大星從東流西。便有音似雷。時人曰。流星之音。亦曰。地雷。於是。僧旻僧曰。非流星。是天狗也。其

吹聲似雷耳。(舒明9・2・23条) ……CL

7 日蝕之。(舒明9・3・2条) ……M

8 長星見西北。時旻師曰。彗星也。見則飢之。(舒明11・

1・25条) ……B

9 星入月。(舒明12・2・7条) ……EI

10 客星入月。(皇極1・7・9条) ……EI

11 月有蝕之。(皇極2・5・16条) ……N

12 有星殞於京北。(天智3・3是月条) ……F

13 有星出于東長七八尺。至九月竟天。(天武5・7

是月条) ……B

14 有物如綿零於難波。長五六尺。広七八寸。則隨風

以飄于松林及葦原。時人曰。甘露也。(天武7・10・

1条) ……G

15 日蝕之。(天武9・11・1条) ……M

16 自戊至子。東方明焉。(天武9・11・3条) ……

A

17 月蝕。(天武9・11・16条) ……N

18 彗星見。(天武10・9・16条) ……B

19 熒惑入月。(天武10・9・17条) ……EI

20 日蝕之。(天武10・10・1条) ……M

21 是夕昏時。大星自東度西。(天武11・8・3条) ……

…C

22 有物形如灌頂幡而火色。浮空流北。每国皆見。或

曰。入越海。是日白氣起於東山。其大四圍。(天武

11・8・11条) ……AG

23 平旦。有虹当于天中央以向日。(天武11・8・17条)

……H

24 彗星出于西北。長丈余。(天武13・7・23条) ……

B

25 昏時。七星俱流東北則隕之。(天武13・11・21条) ……

…CF

26日没時。星隕東方。大如瓮。逮于戌。天文悉乱。

以星隕如雨。(天武13・11・23条)……………F

27有星孛于中央。與昴星雙而行之。及月盡失焉。

(天武13・11是月条)……………IJK

28日有蝕之。(持統5・10・1条)……………M

29是夜。熒惑與歲星於一步内。乍光乍没。相近相避四遍。

(持統6・7・28条)……………I

30日有蝕之。(持統7・3・1条)……………M

31日有蝕之。(持統7・9・1条)……………M

32日有蝕之。(持統8・3・1条)……………M

33日有蝕之。(持統8・9・1条)……………M

34日有蝕之。(持統10・7・1条)……………M

『続日本紀』

35日有蝕之。(文武2・7・1条)……………M

36日有蝕之。(文武2・11・1条)……………M

37日有蝕之。(文武3・11・1条)……………M

38日有蝕之。(大宝1・4・1条)……………M

39日有蝕之。(大宝2・9・1条)……………M

40星晝見。(大宝2・12・6条)……………I

41日有蝕之。(慶雲1・2・1条)……………M

42日有蝕之。(慶雲3・6・1条)……………M

43日有蝕之。(慶雲3・12・1条)……………M

44日有蝕之。(慶雲4・6・1条)……………M

45日有蝕之。(慶雲4・12・1条)……………M

46日有蝕之。(和銅1・11・1条)……………M

47日有蝕之。(和銅2・4・1条)……………M

48日有蝕之。(和銅2・10・1条)……………M

49日有蝕之。(和銅3・4・1条)……………M

50日有蝕之。(和銅3・10・1条)……………M

51日有蝕之。(和銅4・4・1条)……………M

52日有蝕之。(和銅4・9・1条)……………M

53日有蝕之。(和銅6・2・1条)……………M

54日有蝕之。(和銅7・2・1条)……………M

55日有蝕之。(靈龜1・7・1条)……………M

56日有蝕之。(靈龜1・12・1条)……………M

57 日有_レ蝕之。(靈龜 2・⑪・1 条)……………M

58 日有_レ蝕之。(養老 1・11・1 条)……………M

59 日有_レ蝕之。(養老 2・5・1 条)……………M

60 彗星守_レ月。(養老 2・11・12 条)……………BE

61 日有_レ蝕之。(養老 3・5・1 条)……………M

62 白虹南北竟_レ天。(養老 4・1・11 条)……………H

63 熒惑逆行。(養老 4・1・17 条)……………I

64 日有_レ蝕之。(養老 4・9・1 条)……………M

65 日暈如_二白虹貫_一。暈南北有_レ珥。△下略▽ (養老 5・2・

16 条)……………D

66 日有_レ蝕之。(養老 6・3・1 条)……………M

67 有_二客星_一見_二閣道_一。凡五日。(養老 6・7・3 条)……………

…IK

68 太白晝見。(養老 6・7・10 条)……………I

69 太白犯_二歲星_一。(養老 6・7・28 条)……………I

70 熒惑入_二太微左執法中_一。(養老 7・9・9 条)……………

IK

71 夜月犯_二房星_一。(養老 7・11・27 条)……………EJK

72 月犯_二熒惑_一。(神龜 1・4・18 条)……………E

73 日有_レ蝕之。(神龜 1・7・1 条)……………M

74 自_二六月朔_一至是日熒惑逆行。(神龜 1・7・20 条)……………

…I

75 有_レ星孛_二華蓋_一。(神龜 2・1・24 条)……………IK

76 夜月犯_二填星_一。(神龜 2・①・3 条)……………E

77 太白晝見。(神龜 2・6・22 条)……………I

78 晝太白與_二歲星_一芒角相合。(神龜 2・10・29 条)……………

I

79 日有_レ蝕之。(神龜 2・12・1 条)……………M

80 太白犯_二填星_一。(神龜 3・12・12 条)……………I

81 夜月犯_二心大星_一。(神龜 4・1・22 条)……………EJ

82 熒惑入_二東井西亭間_一。(神龜 4・3・25 条)……………I

JK

83 日有_レ蝕之。(神龜 4・5・1 条)……………M

84 日有_レ蝕之。(神龜 5・4・1 条)……………M

85 太白晝見。(神龜 5・5・20 条)……………I

86 太白經_レ天。(神龜 5・8・4 条)……………I

87 夜流星。長可三丈。余光照赤。四断散墮宮中。(神

龜5・9・29条)……………CF

88 熒惑入太微中。(天平1・6・26条)……………IK

89 月入東井。(天平1・7・24条)……………EJ

90 日有蝕之。(天平1・10・1条)……………M

91 熒惑晝見。(天平2・3・16条)……………I

92 太白入太微中。(天平2・8・8条)……………IK

93 日有蝕之。(天平2・9・1条)……………M

94 日有蝕之。(天平3・2・1条)……………M

95 日有蝕之。(天平4・2・1条)……………M

96 熒惑入軒轅。(天平5・1・9条)……………IK

97 太白入東井。(天平5・6・9条)……………IJ

98 日有蝕之。(天平5・7・1条)……………M

99 日有蝕之。(天平6・12・1条)……………M

100 夜大衆星交錯乱行無常所。(天平7・5・4条)……………

I

101 太白與辰星相犯。(天平7・8・2条)……………I

102 日有蝕之。(天平7・⑪・1条)……………M

103 日有蝕之。(天平8・5・1条)……………M

104 夜。太白入月。星有光。(天平8・10・27条)……………

EI

105 日有蝕之。(天平9・5・1条)……………M

106 日有蝕之。(天平10・9・1条)……………M

107 日有蝕之。(天平11・9・1条)……………M

108 日有蝕之。(天平13・3・1条)……………M

109 日有蝕之。(天平14・7・1条)……………M

110 夜月掩熒惑。(天平15・2・25条)……………E

111 夜月掩太白。(天平15・2・27条)……………E

112 日有蝕之。(天平15・7・1条)……………M

113 有星孛於將軍。(天平16・12・2条)……………IK

114 日有蝕之。(天平19・10・1条)……………M

115 日有蝕之。(天平勝宝1・3・1条)……………M

116 日有蝕之。(天平勝宝3・8・1条)……………M

117 日有蝕之。(天平勝宝4・12・1条)……………M

118 日有蝕之。(天平勝宝8・10・1条)……………M

119 有白氣貫日。(天平勝宝8・10・16条)……………AD

120 日有_レ蝕之。(天平宝字3・3・1条)……………M
 121 日有_レ蝕之。(天平宝字4・7・1条)……………M
 122 日有_レ蝕之。(天平宝字5・7・1条)……………M
 123 日有_レ蝕之。(天平宝字6・1・2条)……………M
 124 是夜有_レ星。落于押勝臥屋之上。其大如_レ甕。(天平宝

字8・9・18条)……………FI

125 日有_レ蝕之。(天平神護1・10・1条)……………M
 126 日有_レ蝕之。(天平神護2・10・1条)……………M
 127 日有_レ蝕之。(神護景雲1・3・1条)……………M
 128 日上有_二五色雲_一。(神護景雲1・9・1条)……………D

129 日有_レ蝕之。(神護景雲2・3・1条)……………M
 130 日有_レ蝕之。(神護景雲2・8・1条)……………M
 131 日有_レ蝕之。(神護景雲3・8・1条)……………M
 132 日有_レ蝕之。(宝龜1・8・1条)……………M
 133 是年六七月。彗星入_二於北斗_一。(宝龜1是年条)……………

B K

134 有_レ星隕_二西南_一。其声如_レ雷。(宝龜2・11・29条)……………

F L

135 日有_レ蝕之。(宝龜2・12・1条)……………M
 136 西北空中有_レ声如_レ雷。(宝龜3・5・26条)……………L
 137 日有_レ蝕之。(宝龜3・6・1条)……………M
 138 有_レ虹繞_レ日。(宝龜3・6・16条)……………DH
 139 徃々隕_二石於京師_一其大如_二柚子_一数日乃止。(宝龜3・6・19条)……………F

140 星隕如_レ雨。(宝龜3・12・13条)……………F
 141 彗星見_二南方_一。(宝龜3・12・23条)……………B
 142 有_レ星隕_二南北_一各一。其大如_レ盆。(宝龜4・5・27条)……………

……F

143 日有_レ蝕之。(宝龜4・6・1条)……………M
 144 白虹竟_レ天。(宝龜6・5・14条)……………H
 145 日有_レ蝕之。(宝龜6・10・1条)……………M
 146 是夜。有_二流星_一。其大如_レ盆。(宝龜7・2・6条)……………

……C

147 日有_レ蝕之。(宝龜7・4・1条)……………M

148 太白晝見。(宝龜7・6・4条)……………I

149 每夜。瓦石及塊自落_二内豎曹司及京中徃々屋上_一。明而

視之。其物見在。經廿余日乃止。(宝龜7・9是月条)

.....G

150 日有蝕之。(宝龜8・2・30条).....M

151 日有蝕之。(宝龜9・8・1条).....M

152 日有蝕之。(宝龜10・7・1条).....M

153 太白晝見。(天心1・6・24条).....I

154 太白晝見。(天心1・6是月条).....I

155 空中有聲如雷。(延曆1・2・18条).....L

156 有虹繞日。(延曆1・3・9条).....DH

157 有光挾日。其形円而色似虹。日上復有光向日。長

可三丈。(延曆1・11・13条).....AD

158 日有蝕之。(延曆2・11・1条).....M

159 太白晝見。(延曆3・9・27条).....I

160 太白晝見。(延曆6・7・8条).....I

161 日有蝕之。(延曆8・1・1条).....M

162 日有蝕之。(延曆10・6・1条).....M

『日本後紀』(★印は『日本
紀略』に拠る)

★163 白氣貫日。(延曆11・1・29条).....AD

★164 日有蝕。(延曆11・11・1条).....M

★165 日有蝕。(延曆12・10・1条).....M

★166 日有蝕。(延曆13・4・1条).....M

★167 日有蝕。(延曆14・4・1条).....M

★168 太白晝見。(延曆14・9・28条).....I

169 日有蝕。(延曆15・8・1条).....M

★170 日有蝕。(延曆19・6・1条).....M

★171 日有蝕。(延曆20・5・1条).....M

★172 日有蝕。(延曆21・11是月条).....M

★173 有司奏称。老人星見。臣等謹案。天命苞曰。老人星者

瑞星也。(延曆22・11・1条).....I

174 未時。大星隕。(延曆24・1・22条).....F

175 太白與鎮星見東方。(延曆24・8・27条).....

I

176 是夜月蝕之。(大同1・3・21条).....N

177 日赤無光。兵庫夜鳴。是夜月蝕之。(大同1・3・22条)

.....DN

178 日赤無_レ光。(大同1・3・23条)……………D

179 日有_レ蝕之。(大同3・7・1条)……………M

180 太白晝見。(大同3・9・11条)……………I

★181 大極殿龍尾道上有_二雲氣_一狀如烟。須臾竭滅。(弘仁2・

7・15条)……………A

182 二星乍合乍離。狀似_二相闕_一。(弘仁2・8・12条)……………

I

183 日抱_レ翼。(弘仁2・⑫・9条)……………DJ

★184 日有_レ蝕之。(弘仁4・4・1条)……………M

185 日有_レ蝕之。(弘仁6・8・1条)……………M

★186 日有_レ蝕之。(弘仁7・2・1条)……………M

★187 日有_レ蝕之。(弘仁8・2・1条)……………M

★188 日有_レ蝕之。(弘仁9・6・1条)……………M

★189 有_レ虹貫_レ日。(弘仁10・3・1条)……………DH

★190 日有_レ蝕之。(弘仁10・6・1条)……………M

★191 太白晝見。(弘仁10・8・1条)……………I

★192 日有_レ蝕之。(弘仁10・12・1条)……………M

★193 日有_レ蝕之。(弘仁13・4・1条)……………M

★194 有_レ星。孛_二于西南_一。三日而不見。(弘仁14・1・5

条)……………I

★195 日有_レ蝕之。(弘仁14・9・1条)……………M

★196 巳時。日無_レ色。輪暈兩傍小有_レ光。宛似_レ虹。薄雲承_レ之。東西延蔓。亦如_レ引_レ縠。(天長1・2・7条)……………

D

★197 太白晝見。連日不_レ已。(天長6・5・29条)……………

I

★198 日有_レ蝕之。(天長6・11・1条)……………M

『続日本後紀』

199 日有_レ蝕之。(天長10・3・1条)……………M

200 日有_レ蝕之。(天長10・8・1条)……………M

201 月有_レ蝕之。(承和1・1・16条)……………N

202 日有_レ蝕之。(承和1・2・1条)……………M

203 東方白虹見。(承和3・7・6条)……………H

204 有_二恠異_一之。雲竟_レ天。其端涯在_二良坤兩角_一。經_二三剋程_一。

稍以銷滅。(承和3・11・9条)……………A

205 彗星見于東南。其光芒東至天涯。(承和4・3・4条)……………B

206 彗星猶見。但為月光所奪。其光芒微少耳。(承和4・

3・9条)……………BE

207 日有蝕之。(承和4・12・1条)……………M

208 有物如粉。從天散零。逢雨不銷。或降或止。(承和

5・7・18条)……………G

209 東方有聲。如伐大鼓。(承和5・7・20条)……………

L

210 有物如灰。從天而雨。累日不止。但雖似恠異。

無有損害。〈下略〉。(承和5・9・29条)……………

G

211 是夜。彗星見東南。其氣赤白。竟天數許里。須臾而

不見。(承和5・10・22条)……………B

212 彗星猶見。(承和5・10・26条)……………B

213 彗星見東方。是星起十月廿二日。至今月十七日。

每夜寅尅見東方。其長七八許尺。(承和5・11・17条)

……………B

214 彗星見兌方。長一許丈。(承和6・1・23条)……………

B

215 終日密雲。(承和6・4・25条)……………A

216 是夜。有赤氣方冊丈。從坤方來。至紫震殿之上。

去地廿許丈。光如炬火。須臾而滅。(承和6・5・28

条)……………A

217 日有蝕之。(承和7・4・1条)……………M

218 日有蝕之。(承和7・10・2条)……………M

219 天中西方有聲如鼓。一声而止。(承和7・10・26条)……………

……………L

220 日有蝕之。(承和8・4・1条)……………M

221 日色赤如血。須臾復常。(承和8・4・3条)……………

D

222 彗星見西方。(承和8・11・6条)……………B

223 彗星猶見。(承和8・11・21条)……………B

224 日有蝕之。(承和10・2・1条)……………M

225 日赤無光。終日不復。非雲非霧。黑氣亙天。至于

午後。時々日見。其色黃赤。(承和10・5・1条)……………

A D

226 令_レ神祇官陰陽寮_一。解_中謝_上之。是日午刻。日色明潔也。

(承和10・5・3条) …………… D

227 月有_レ蝕之。(承和10・8・15条) …………… N

228 日有_レ蝕之。(承和11・2・1条) …………… M

229 丑刻。月輪半虧。質明稍滿。(承和12・6・15条) ……………

N

230 日有_レ蝕之。(承和12・7・1条) …………… M

231 月有_レ蝕之。(承和12・12・15条) …………… N

232 天有_二鳴聲_一。余響殷々。良久而止。(承和14・③・4条)

…………… L

233 此夜。月暈之外有_二白氣_一繞_レ之。(承和14・6・12条) ……………

…………… E

234 天北有_レ声。如_レ雷。(承和14・11・9条) …………… L

235 人定之時。有_下如_二流星_一者_上。自_レ西殞_レ東。其光芒広_二町

余。長十許丈。(承和14・11・20条) …………… C F

236 日有_レ蝕之。(承和15・5・1条) …………… M

237 日有_レ蝕之。(嘉祥2・5・1条) …………… M

238 天西北有_二電光_一數十度。(嘉祥2・12・7条) ……………

A

239 有_下如_二流星_一者_上。經_レ天落_レ東。其大如_レ月。光色赤青。

(嘉祥3・1・30条) …………… C F

『文德実録』

240 夜有_二流星_一。頭尾転行。(嘉祥3・6・20条) ……………

C

241 天南有_レ声。如_レ雷。(嘉祥3・8・24条) …………… L

242 日有_レ蝕之。(嘉祥3・9・1条) …………… M

243 是夜。有_二流星_一。大如_レ斗。余光久之乃滅。(仁寿1・1・

30条) …………… C

244 日有_レ蝕之。(仁寿1・3・1条) …………… M

245 月有_レ蝕之。(仁寿1・3・21条) …………… N

246 夜。有_下如_二火光_一者_上。墜_二於殿前_一。左右驚乱。須臾乃定。

(仁寿1・7・22条) …………… A F

247 日有_レ蝕之。(仁寿1・9・1条) …………… M

248 日無_二精光_一。中有_二黒点_一。大如_二李子_一。(仁寿1・11・

6 条) …………… D

249 是夕。彗星出于西方。長可五丈。(仁寿 2・2・20 条)

…………… B

250 日有蝕之。(仁寿 2・3・1 条) …………… M

251 日有蝕之。(仁寿 2・⑧・1 条) …………… M

252 日有蝕之。(齐衡 1・7・1 条) …………… M

253 有長星出於東北。(齐衡 2・2・3 条) …………… B

254 日有蝕之。(齐衡 2・6・1 条) …………… M

255 日有蝕之。(齐衡 3・12・1 条) …………… M

256 日有蝕之。(天安 1・5・1 条) …………… M

257 是日。有白雲広四丈許。東西竟天。(天安 1・10・15

条) …………… A

258 日有蝕之。(天安 2・4・1 条) …………… M

259 空中有聲。如雷一度。(天安 2・4・11 条) ……………

L

260 是夜月蝕。(天安 2・4・15 条) …………… N

261 夜有流星入天。長一丈許。(天安 2・5・27 条) ……………

C

262 無雲而雷。遲明有星。入月魄中。(天安 2・5・28

条) …………… E I

263 夜。有如下流星者。經天西落。大如月。光青赤。其
後。西方空中有聲。如雷二度。(天安 2・6・10 条) ……

…………… C F L

264 早旦有白雲。自艮亘坤。時人謂之旗雲。(天安 2・

6・11 条) …………… A

265 是夜。有雲竟天。自艮至坤。人謂之旗雲。(天安

2・8・19 条) …………… A

266 是夜。歲星守牽牛。(天安 2・8・24 条) …………… I

267 夜月蝕。(天安 2・9・3 条) …………… N

『三代実録』

268 陰陽寮奏言。夜有星入紫微宮。赤如炎火。長十餘
丈。〔下略〕。(天安 2・8・29 条) …………… I K

269 夜。月中有黑色。須臾月色赤如血。(天安 2・9・3
条) …………… E

270 是夜。空中有聲如雷。(天安 2・9・14 条) ……………

L

- 271 夜有_レ流星。自_二東南_一行_二西北_一。星所_レ落之處。有_レ声如_レ雷。(天安2・9・29条)……………CFL
- 272 日有_レ蝕之。(天安2・10・1条)……………M
- 273 有_二赤黄白氣_一。形如_二車輪_一。統_レ日。(貞觀1・2・11条)……………AD
- 274 日有_レ蝕之。(貞觀1・4・1条)……………M
- 275 日有_レ蝕之。(貞觀1・10・1条)……………M
- 276 天東南有_二異雲_一。中有_二赤色_一。如_二電光_一激。(貞觀1・10・15条)……………A
- 277 夜有_二流星_一。出_二自_二東北_一入_二於_二西南_一。光照_レ地。(貞觀2・7・24条)……………C
- 278 夜有_二流星_一。出_二自_二南方_一入_二於_二西北_一。光照_レ地。(貞觀2・8・27条)……………C
- 279 日有_レ蝕之。(貞觀3・2・1条)……………M
- 280 空中有_レ声如_レ雷。(貞觀3・4・14条)……………L
- 281 月有_レ蝕之。(貞觀3・8・16条)……………N
- 282 空中有_レ声如_レ雷。(貞觀3・8・27条)……………L

283 天東有_レ声如_レ雷。(貞觀4・3・16条)……………L

284 日有_レ蝕之。(貞觀4・8・1条)……………M

285 自_二十六日_一至_二十八日_一。日初_レ昇。白無_レ光。月初_レ出。赤如_レ丹。今日並復_レ旧。(貞觀5・2・19条)……………DE

286 空中有_レ声如_レ雷。(貞觀5・3・2条)……………L

287 曉有_二流星_一西行。(貞觀5・⑥・19条)……………C

288 日有_レ蝕之。(貞觀5・7・1条)……………M

289 晨日無_レ光。(貞觀5・8・11条)……………D

290 晨日無_レ光。少選復_レ本。(貞觀5・8・12条)……………

D

291 彗星見_レ東。在_二宮室宿_一。長四許尺。(貞觀6・3・14条)……………BJ

BJ

292 日有_レ蝕之。(貞觀6・7・1条)……………M

293 有_レ星。出_二自_二宮室_一入_二羽林東_一。赤黄無_レ光。(貞觀6・7・23条)……………IJK

IJK

294 是夜有_レ星。出_二紫微宮_一入_二昴_一。長可_二三丈餘_一。(貞觀6・9・9条)……………IJK

IJK

295 是夜有_レ星。出_二自_二奎婁間_一入_二於_二外壻_一。(貞觀6・9・

14条) …………… I J K

296 夜北山有_レ光如_レ電。又朱雀門前見_二赤光_一。長五尺許。

(貞觀6・10・7条) …………… A

297 夜。熒惑入_二守弓_一。(貞觀6・11・13条) …………… I J

298 日有_レ蝕之。(貞觀6・11・30条) …………… M

299 夜有_レ星。出_レ庚入_レ甲。推_レ之出_二天苑_一入_二常陳_一。(貞觀

7・1・3条) …………… I K

300 是日夜。有_レ星。出_二東井_一入_レ軫。色白。長二丈餘。(貞

觀7・2・2条) …………… I J

301 日有_レ蝕之。(貞觀7・6・1条) …………… M

302 遲明。月色正黃。有_二赤雲_一覆_レ之。(貞觀7・6・21条)

…………… A E

303 是夜。有_レ星。出_二卷舌_一入_二畢首_一。長可_二三尺_一。(貞觀7・

9・9条) …………… I J K

304 夜有_レ星。出_二墳墓_一下入_二貫須女_一。(貞觀7・9・10条)

…………… I J K

305 夜有_レ星。出_二奎婁北_一入_二抵土司空_一。(貞觀7・12・24

条) …………… I J

306 有_レ星。出_二織女_一入_二女林_一。(貞觀8・1・27条) ……………

I K

307 日出之時。宮頭出_レ室入_二紫微宮_一。色赤黃。(貞觀8・③・

15条) …………… I J K

308 日有_レ蝕之。(貞觀8・5・1条) …………… M

309 夜有_レ星。出_二奎入_二大陵_一。(貞觀8・6・28条) ……………

I J K

310 日有_レ蝕之。(貞觀8・11・1条) …………… M

311 夜有_レ星。出_二大畢_一抵_二貫大角_一入_二張提_一。(貞觀8・11・

5条) …………… I J K

312 日有_レ蝕之。(貞觀9・5・1条) …………… M

313 星晝見。(貞觀9・7・24条) …………… I

314 太白在_レ軫經_レ天。與_レ日相去可_二十餘丈_一。(貞觀9・9・

27条) …………… I J

315 晝有_二流星_一。東南行。光照_レ地。(貞觀9・10・17条) ……………

…………… C

316 日有_レ蝕之。(貞觀9・11・1条) …………… M

317 彗星見_二紫微宮西_一。貫_二內階_一。長可_二五尺_一。(貞觀9・

11・23条)……………BK

318 日上有_レ冠。左右成_レ珥。色黃白。(貞觀9・11・30条)……………

……D

★319 日蝕。(貞觀10・3・30条)……………M

★320 月宿至_レ弓。(貞觀10・4・13条)……………EJ

★321 夜月虧。細如_三日初生_二魄。(貞觀10・4・14条)……………

……N

★322 歲星犯_レ房。右服經歷七日。(貞觀10・5・10条)……………

IJ

★323 是夜。有_レ星。出_レ自_二軒轅_一入_二於紫微宮_一。(貞觀10・

9・11条)……………IK

324 日有_レ蝕之。(貞觀11・3・1条)……………M

325 夜。月犯_二心前星_一。(貞觀11・7・6条)……………EJ

326 夜。月犯_二入南斗魁中_一。(貞觀11・7・8条)……………

EJK

327 日有_レ蝕之。(貞觀11・9・1条)……………M

328 日有_レ蝕之。(貞觀12・3・1条)……………M

329 是日夜。白虹見_二東北_一。首尾着_レ地。(貞觀12・6・10条)

……………H

330 日有_レ蝕之。(貞觀12・9・1条)……………M

331 自去十日_二太白經_レ天至今日_一不見。(貞觀13・1・14

条)……………I

332 日有_レ蝕之。(貞觀13・3・1条)……………M

333 月行_二奄心前星_一。吞_二飢其中大星_一。(貞觀13・4・15

条)……………EJ

334 夜。有_二大流星_一。出_二東方入_二天市中_一。其色赤白。入後。

其尾白而曲環。(貞觀13・8・23条)……………CK

335 日有_レ蝕之。(貞觀13・⑧・1条)……………M

336 夜有_レ流星。出_二東南入_二女林_一。星大如_二柚子_一。青而

有_レ光。(貞觀13・⑧・29条)……………CK

337 夜有_レ星。出_二文昌第二第三星與_二太陽守星_一中_上。歷_二紫微

宮_一指_二西南_一行。長可_二三丈_一。其色赤黃。有_レ光照_レ地。

(貞觀13・9・14条)……………IK

338 日有_レ蝕之。太白從_二西貫_レ東。共_レ宿。(貞觀13・12・3

条)……………IJM

(在危宿)

339 晝有_二大流星_一。(貞觀14・7・9条)……………C

340 申時。白雲氣起「東北」「西南」。形如「疋布」。(貞觀14・

7・10条)……………A

341 酉初。月有蝕之。至「戌復」本。輪下片黑如「聚墨」。(貞

觀14・7・15条)……………EN

342 夜。月入「箕」。(貞觀14・9・6条)……………EJ

343 日赤無光。即日宿在「氐」。(貞觀14・9・16条)……………

DJ

344 天南有「声如雷」。(貞觀14・11・29条)……………L

345 流星出。從「七星」邊入「弧」。其色白。(貞觀15・2・11条)

……………CK

346 夜有「流星」。入「女林」。亦入「天市」。其色皆赤。(貞觀

15・4・9条)……………CK

347 流星入「翼」。其色赤。(貞觀15・4・26条)……………CJ

348 日蝕無光。虧「晨」如「月初生」。自「午」至「未」乃復。(貞觀15・

7・1条)……………M

349 時加「辰」。日重暈。左右有「珥」。其下雲氣如「龍」。(貞觀

15・10・20条)……………D

350 酉時。流星入「參南」邊。其色青白。体大尾短。欲入之

時分迸連入。(貞觀15・11・27条)……………CJ

351 是夜。有「流星」。出「自」婁與「天倉」間。入「奎南」邊。

將入之時。為「三連」沒。(貞觀15・12・2条)……………

CJK

352 是夜。文昌星微而不明。(貞觀16・2・27条)……………

IK

353 夜。流星入「犯」太微左執法第二星。大如「李実」。色赤尾

短。(貞觀16・3・1条)……………C

354 時加「未」。日有「五重暈」。白虹貫「日」。即日在「胃宿」。

下略」。(貞觀16・4・7条)……………DHJ

355 申時。日赤無光。此夜。月有蝕之。(貞觀16・4・18

条)……………DN

356 日在「畢宿」。薄蝕如「不復」而隱沒。是日。有「片雲」。

如「墨染紗」而掩「日」。又非「雲非霞」。黃赤色氣。延蔓蔽

天。(貞觀16・4・24条)……………ADJ

357 日有蝕之。(貞觀16・6・1条)……………M

358 酉時。日未入。流星出「自」織女西邊。入「大陵卷舌」間。

色赤有光。(貞觀16・6・15条)……………CK

359 酉時。流星出_レ自_レ室入_二登地_一。長可_二一丈餘_一。其色黃白。

(貞觀16・6・29条)……………C J

360 日有_レ蝕之。(貞觀16・12・1条)……………M

361 是夜。有_二流星_一。出_レ自_二七星_一入_レ張。長一丈餘。其色赤。

(貞觀16・12・5条)……………C J K

362 是夜。月犯_二昴星_一。(貞觀16・12・11条)……………E J K

363 夜。月犯_二輿鬼_一。(貞觀16・12・16条)……………E J

364 酉時。月有_レ蝕之。(貞觀17・1・6条)……………N

365 巳時。日暈。(貞觀17・1・21条)……………D

366 酉時。日暈而有_レ珥。(貞觀17・1・23条)……………D

367 日有_二冠纓_一宿_レ奎。(貞觀17・2・17条)……………D J

368 卯時。白彗見_二東北_一。其色赤。以成_二芒角_一。至_二五月二

日_一。其体長可_二一丈餘_一。始出_二五車_一。稍掃_二八穀星_一。其

氣雖_二耗滅_一而未_レ滅_レ亡。(貞觀17・4・28条)……………

B K

369 太白晝見_レ經_レ天。卽歷_二軒轅_一。留_レ宿少微。(貞觀17・5・

14条)……………I K

370 夜有_二雲氣_一竟_レ天。形如_レ幡。頭垂_二西山_一。尾掛_二東山_一。

(貞觀17・5・16条)……………A

371 夜有_レ星孛_二東北_一。(貞觀17・5・18条)……………I

372 辰時。有_二流星_一落_レ於東南。大可_二一尺_一。長可_二六尺_一。

其色純白。(貞觀17・5・30条)……………C

373 日少_レ光。星月並晝見。(貞觀17・6・3条)……………D

E I

374 星月並晝見。(貞觀17・6・4条)……………E I

375 星月並晝見。(貞觀17・6・5条)……………E I

376 夜丑三刻。日有_レ蝕之。(貞觀17・11・1条)……………M

377 是夜。月有_レ蝕之。(貞觀17・11・15条)……………N

378 日色變_レ赤。西京_二三條降_レ霧陰。往還之人不_レ弁_二其形_一。

須臾開霽。日色復_レ常。(貞觀18・1・3条)……………D

379 日有_レ蝕之。(貞觀18・5・1条)……………M

380 是夜戌時。黑雲起_レ自_二同山嶺_一亘_二西南_一。形如_二四副幙_一。

長十許丈。于_レ時四方晴明。無_レ有_二雲氣_一。(貞觀18・7・

27条)……………A

381 日入之時。赤雲八條起_レ自_二東方_一直指_二西方_一。広殆及_二竟

天_一。(貞觀18・8・6条)……………A

382 寅時。大流星出自太微東番星辺抵大陵星。入閣道

與附路星之間。(貞觀18・9・23条)……………CK

383 天南有白雲亘東西。(貞觀18・9・25条)……………

A

384 日有蝕之。(貞觀18・11・1条)……………M

385 晡時。大流星出自天中庚指天中艮而行。可三丈

没。以晷推之。出天津辺入紫微宮中。(元慶1・

1・24条)……………CK

386 時加戌。客星在辟見西方。可謂含譽瑞星也。(元

慶1・1・25条)……………IJ

387 夜丑一刻。日有蝕之。虧初子三刻三分。復至寅二刻

一分。(元慶1・4・1条)……………M

388 歲星行犯太微左執法。(元慶1・8・25条)……………I

389 晨。太白與歲星同舍。相去八寸。後日晨。相去尺餘。

(元慶1・8・29条)……………I

390 日有蝕之。(元慶1・10・1条)……………M

391 日有蝕之。(元慶2・4・1条)……………M

392 亥時。有大流星。出自氐南入軫翼間。其尾二許

丈。色赤有光。衆星隨行。所過之處。木葉作聲。(元

慶2・5・9条)……………CIJ

393 雷不雨。夜熒惑守天江經二ケ日。(元慶2・6・19

条)……………IK

394 夜有流星。出自斗辺入箕星下。色白尾短。(元慶

2・6・21条)……………CJK

395 夜有流星。出自騰蛇入雷電星。色赤。長二丈餘。

(元慶2・6・27条)……………CK

396 夜有光。見紫震仁壽兩殿之間。曉有流星南行。大

可二丈。京城皆見之。(元慶2・8・2条)……………

AC

397 夜時加戌四刻一分。日蝕十五分之十三半強。(元慶2・

9・30条)……………M

398 晨。太白見箕度。逆行未復。(元慶2・11・19条)……………

……………IJ

399 寅時。月入氐中。(元慶2・11・26条)……………EJ

400 卯時。月犯房星并鈎鈴星。(元慶2・11・27条)……………

EJK

401 是夜。月犯畢。(元慶2・12・11条)……………E J
 402 夜。月蝕。(元慶3・3・15条)……………N
 403 日有蝕之。(元慶3・9・1条)……………M
 404 熒惑逆行。自太微左掖門入犯守左執法。(元慶3・10・12条)……………I K
 405 是夜。月入氐中。(元慶3・11・24条)……………E J
 406 夜。熒惑入氐。(元慶3・11・28条)……………I J
 407 月入氐。(元慶3・12・22条)……………E J
 408 日有蝕之。(元慶4・2・1条)……………M
 409 卯時。天東空中有聲。一声而止。(元慶4・2・11条)……………L
 410 東方有聲。如雷。(元慶4・2・23条)……………L
 411 熒惑逆行。犯房上相。(元慶4・4・12条)……………I J K
 412 寅時。有大流星。出自角亢間入梗河星。(元慶4・4・29条)……………C J K
 413 寅時。有大流星。出自角亢間入梗河星。(元慶4・11・29条)……………C J K

414 夜有流星。自東方來入弧星。其色赤。(元慶4・12・1条)……………C K
 415 戌時。天有聲二度。地亦震動。(元慶4・12・19条)……………L
 416 戌一刻。空中有聲。丑時地震。(元慶4・12・21条)……………L
 417 日有蝕之。(元慶5・2・1条)……………M
 418 夜有星。出自房入天市。色青。(元慶5・3・21条)……………I J K
 419 午時。日有重暈。内黑外赤。(元慶5・5・16条)……………D
 420 有星。出自列肆星入犯心中央星。色赤。長一丈餘。(元慶5・7・7条)……………I J K
 421 日有蝕之。(元慶5・8・1条)……………M
 422 夜月犯畢大星。(元慶6・6・24条)……………E J
 423 日有蝕之。(元慶6・⑦・1条)……………M
 424 夜。月行奄犯牽牛第二星。(元慶6・9・7条)……………E

425是夜。月行奄陵。歲星入月中。從西貫東。(元慶6・11・4条)……………EI

426夜有流星向西北行。(元慶6・11・15条)……………C

427日有蝕之。(元慶6・12・1条)……………M

428昏時。月暈行犯太微西蕃上將星。亥時。白雲氣自北方來入暈中。其數五片。広一尺許。長一丈。四片乃滅。一片貫月。良久消却。(元慶7・3・10条)……………AEK

429日有蝕之。(元慶7・6・1条)……………M

430申時。日右有珥。上下有白雲。日即宿翼。(元慶7・7・26条)……………DJ

431申時。日左右有珥。其下雲氣。形如龍馬。(元慶7・7・27条)……………D

432是夜。熒惑失度。順行守房。經三日退去。(元慶7・11・16条)……………IJ

433日出之時。月入軒轅星。(元慶7・11・18条)……………EK

434日有蝕之。(元慶7・12・1条)……………M

435日有冠。右有珥。色黃。左有白虹向日。是名日抱。(元慶8・1・23条)……………DH

436自辰至巳。日有冠。左右有珥。色白。即日宿危。夜。天東南有星見。長可一丈。(元慶8・1・24条)……………DIJ

437夜有流星出自北斗。犯紫微宮西蕃第五星。色青白。大如柚子。(元慶8・4・10条)……………CK

438月在房宿。(元慶8・4・14条)……………EJ

439夜有流星出自北極大星入三公星。大如李実。色白有光。(元慶8・5・29条)……………CK

440日有蝕之。(元慶8・6・1条)……………M

441辰時。天西南有聲如雷一度。(元慶8・8・1条)……………L

442自戌至子。小星四方流散。殞墜如雨。(元慶8・8・4条)……………CF

443自日没至人定。流星東西南北分散行殞如雨。自人定至于夜分。或出入紫微宮。犯衆星宮。或出入北斗貫索。陵内外宿。其數不可勝計。(元慶8・

8・5条)……………CFK

444寅時。有_レ大流星。長一丈許。自_二東南行_一西北。遂殞_二於地_一。其響如_レ雷。(元慶8・9・3条)……………CF

445日有_レ蝕之。(元慶8・12・1条)……………M

446寅時。填星貫_レ月。(仁和1・1・12条)……………EI

447自_レ未至_レ申。日上有_レ背向外。其跡如_レ張弓。長一許丈。

(仁和1・1・16条)……………D

448酉時。日色變_レ黑。光散如_レ射。(仁和1・5・22条)……………

…D

449天有_二青雲自_二東北竟_一西南_一。(仁和1・7・30条)……………

…A

450夜有_二流星自_二南方來入_二五車中_一。其色黃白。(仁和1・

8・4条)……………CK

451寅時。太白順行。犯_二陵太微左執法_一。又月行入_二太微

右掖門_一出_二左掖門_一。(仁和1・8・27条)……………EIK

452酉時。有_二流星_一。自_二西海行_一東北。(仁和1・10・25

条)……………C

453日有_レ蝕之。(仁和1・11・1条)……………M

454是夜。流星出_レ自_二心前星_一。貫_二心大星入_二天江_一。(仁和

1・11・20条)……………CJK

455夜有_二大流星_一。出_レ自_二天中甲指_一天中丙。行三丈没。

以_二晷度推_一之。出_レ自_二紫微宮入_二天市垣中_一。跡如_二大

壩_一。色赤白有_レ光。(仁和1・11・26条)……………CK

……………L

456巳時。天東南有_レ声。如_二高樓壞落_一。(仁和1・12・20条)

457申時。日右有_レ珥。(仁和2・1・28条)……………D

…D

458辰時。日上有_レ冠。左右成_レ珥。(仁和2・2・5条)……………

14条)……………DJ

459辰時。日有_二冠纓_一。其色黃白。日即宿_二奎_一。(仁和2・2・

460是夜。自_レ子至_レ丑。月黑無_レ光。寅時自_二下端稍成_レ光。

(仁和2・4・14条)……………E

461日有_レ蝕之。(仁和2・5・1条)……………M

462夜有_二流星_一。出_レ自_二鉤陳歷_二內階入_二文昌第一二星間_一。

色青有_レ光。(仁和2・5・23条)……………CK

463天東南有_レ声如_レ雷。(仁和2・5・26条)……………L

464夜有_二流星_一。出_レ從_二大陵以抵_二傳舍入_二華蓋_一。其色青。

465 自_レ亥至_レ子。有_二大鈴声_一。当_二左仗上_一。鳴_二於空中_一。寅
時亦鳴焉。(仁和2・9・11条)……………L

466 日有_レ蝕之。(仁和2・10・1条)……………M

467 是夜。始_レ自_二戌一_起。月有_二冠纓_一。左右為_レ珥。至于
亥時_一。為_二白暈氣_一。及_レ將_二消滅_一。猶有_二兩珥_一。(仁和

3・3・14条)……………E

468 日有_レ蝕之。(仁和3・4・1条)……………M

469 虹降_二東宮_一。其尾竟_レ天入_二內藏寮_一。(仁和3・7・6条)

……………H

470 夜中東西有_レ声如_レ雷。(仁和3・7・30条)……………L

471 達智門上有_レ氣。如_レ煙非_レ煙。如_レ虹非_レ虹。飛上_レ属_レ天。

或人見_レ之。皆曰。是羽蟻也。時人_二云_一。古今未有_二如此
之異_一。〈下略〉。(仁和3・8・4条)……………A

『日本書紀』の場合

A……………1 16 22の三条

B……………3 4 8 13 18 24の六条

C……………6 21 25の三条

D……………ナシ

E……………9 10 19の三条

F……………12 25 26の三条

G……………14 22の二条

H……………23の一条

I……………9 10 19 27 29の五条

J……………27の一条

K……………27の一条

L……………6の一条

M……………2 5 7 15 20 28 30 31 32 33 34の十一条

N……………11 17の二条

固有名星……………客星(10)、熒惑(19 29)、歳星(29)

の三条・四例・三種類

『続日本紀』の場合

A……………119 157の二条

B……………60 133 141の三条

C……………87 146の二条

D……………65 119 128 138 156 157の六条

E……………60 71 72 76 81 89 104 110 111の九条

F	87 124 134 139 140 142の六条
G	149の一条
H	62 138 144 156の四条
I	40 63 67 68 69 70 74 75 77 78 80 82 85 86 88 91 92 96 97 100 101
J	104 113 124 148 153 154 159 160の二九条
K	71 81 82 89 97の五条
L	67 70 71 75 82 88 92 96 113 133の一〇条
M	134 136 155の三条
N	35 36 37 38 39 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56
固有名星	108 109 112 114 115 116 117 118 120 121 122 123 125 126 127 129 130 131 132 135 137
太白(68 69 77 78 80 85 86 92 97 101 104 111 148 153 154 159 160)	143 145 147 150 151 152 158 161 162の七二条
歳星(69 78)、太微左執法(70)、填星(76 80)	
心大星(81)、辰星(101)の二九条・三四例・八種類	
熒惑(63 70 72 74 82 88 91 96 110)、客星(67)	

『日本後紀』の場合

A	163 181の二条
B	ナシ
C	ナシ
D	163 177 178 183 189 196の六条
E	ナシ
F	174の一条
G	ナシ
H	189の一条
I	168 173 175 180 182 191 194 197の八条
J	183の一条
K	ナシ
L	ナシ
M	164 165 166 167 169 170 171 172 179 184 185 186 187 188 190 192 193 195 198の九条
N	176 177の二条
固有名星	太白(168 175 180 191 197)、老人星(173)、鎮星(175)の六条・七例・三種類

『続日本後紀』の場合

A	204	215	216	225	238	の五条
B	205	206	211	212	213	214
C	235	239	の二条	222	223	の八条
D	221	225	226	の三条		
E	206	233	の二条			
F	235	239	の二条			
G	208	210	の二条			
H	203	の一条				
I	ナシ					
J	ナシ					
K	ナシ					
L	209	219	232	234	の四条	
M	199	200	202	207	217	218
N	201	227	229	231	の四条	
固有名星	ナシ					
『文徳実録』の場合						
A	246	257	264	265	の四条	

B
249
253
の二条

C
240
243
261
263
の四条

D
248
の一条

E
262
の一条

F
246
263
の二条

G
ナシ

H
ナシ

I
262
266
の二条

J
ナシ

K
ナシ

L
241
259
263
の三条

M
242
244
247
250
251
252
254
255
256
258
の一〇条

N
245
260
267
の三条

固有名星
二種類
歳星(266)、牽牛(266)の一条・二例・

『三代実録』の場合

A
273
276
296
302
340
356
370
380
381
383
396
428
449
471
の一四条

K			J			I	H	G	F	E	D	C	B
268	412	347	291	451	352	268	329	ナシ	271	425	269	273	291
293	413	350	293	の四	368	293	354		442	428	457	395	317
294	418	351	294	三条	369	294	435		443	433	458	277	368
295	420	354	295		371	295	469		444	438	459	278	の三
299	422	356	297		373	297	の四			446	318	287	条
303	430	359	300		374	299	条			451	343	315	
304	432	361	303		375	300				460	349	334	
306	436	362	304		386	303				467	354	336	
307	438	363	305		388	304					355	339	
309	454	367	307		389	305				362	356	345	
311	459	386	309		393	306				363	365	346	
317	の五	392	311		398	307				373	366	347	
323	三条	394	314		404	309				374	367	350	
326		398	320		406	311				375	373	351	
334		399	322		411	313				399	378	353	
336		400	325		418	314				400	419	358	
337		401	326		420	322				401	430	359	
345		405	333		425	323				405	431	361	
346		406	338		432	331				407	435	372	
351		407	342		436	337				422	436	382	
352		411	343		446	338				424	447	385	
												三九	392

										N		M	L		
										281	461	272	270	439	358
										321	466	274	280	443	361
										341	468	275	282	450	362
										355	の四	279	283	451	368
										364	五条	284	286	454	369
										377		292	409	455	382
										402		298	410	462	385
										の七		301	415	464	393
										条		308	416	の五	394
												310	441	〇条	395
												312	456		400
												316	463		404
												319	465		411
												324	470		412
												327	の一		413
												328	五		414
												330	条		418
												332			420
												335			428
												338			433
															437

種類

文昌第一二星(462)の三六条・四三例・二三
西蕃第五星(437)、北極大星(439)、填星(446)、
一二星(424)、太微西蕃上將星(428)、紫微宮
451)、心中央星(420)、畢大星(422)、牽牛第
附路星(382)、客星(386)、太微左執法(388 404
(337)、太陽守星(337)、太微左執法第二星(353)、
(325 333 454)、心大星(333 454)、文昌第二第三星
(314 331 338 369 389 398 451)、歳星(322 388 389 425)、心前星
織女(306 358)、宮頭(307)、大角(311)、太白
固有名星……熒惑(297 393 404 406 411 432)、土司空(305)、

第一表

日本書紀

年次 \ 項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	合計
推古28	1														1
36													1		1
舒明6		1													1
7		1													1
8													1		1
9			1									1	1		3
11		1													1
12					1				1						2
皇極1					1				1						2
2														1	1
天智3						1									1
天武5		1													1
7							1								1
9	1												1	1	3
10		1			1				1				1		4
11	1		1				1	1							4
13		1	1			2			1	1	1				7
持統5													1		1
6									1						1
7													2		2
8													2		2
10													1		1
合 計	3	6	3		3	3	2	1	5	1	1	1	11	2	42

〔備考〕 当該項目記事の所見される年次のみを記入してある。以下の三代実録まで同様である。

続日本紀

年次 \ 項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	合計
文武 2													2		2
文武 3													1		1
大宝 1													1		1
大宝 2									1				1		2
慶雲 1													1		1
慶雲 3													2		2
慶雲 4													2		2
和銅 1													1		1
和銅 2													2		2
和銅 3													2		2
和銅 4													2		2
和銅 6													1		1
和銅 7													1		1
靈龜 1													2		2
靈龜 2													1		1
養老 1													1		1
養老 2		1			1								1		3
養老 3													1		1
養老 4								1	1				1		3
養老 5				1											1
養老 6									3		1		1		5
養老 7					1				1	1	2				5
神龜 1					1				1				1		3
神龜 2					1				3		1		1		6

神龜 3									1						1
神龜 4					1				1	2	1		1		6
神龜 5			1			1			2				1		5
天平 1					1				1	1	1		1		5
天平 2									2		1		1		4
天平 3													1		1
天平 4													1		1
天平 5									2	1	1		1		5
天平 6													1		1
天平 7									2				1		3
天平 8					1				1				1		3
天平 9													1		1
天平10													1		1
天平11													1		1
天平13													1		1
天平14													1		1
天平15					2								1		3
天平16									1		1				2
天平19													1		1
天平勝宝 1													1		1
天平勝宝 3													1		1
天平勝宝 4													1		1
天平勝宝 8	1				1								1		3
天平宝字 3													1		1
天平宝字 4													1		1

天平宝字 5													1		1
天平宝字 6													1		1
天平宝字 8						1			1						2
天平神護 1													1		1
天平神護 2													1		1
神護景雲 1				1									1		2
神護景雲 2													2		2
神護景雲 3													1		1
宝亀 1		1									1		1		3
宝亀 2						1						1	1		3
宝亀 3		1		1		2		1				1	1		7
宝亀 4						1							1		2
宝亀 6								1					1		2
宝亀 7			1				1		1				1		4
宝亀 8													1		1
宝亀 9													1		1
宝亀10													1		1
天応 1									2						2
延暦 1	1			2				1					1		5
延暦 2													1		1
延暦 3									1						1
延暦 6									1						1
延暦 8													1		1
延暦10													1		1
合 計	2	3	2	6	9	6	1	4	29	5	10	3	72		152

日本後紀

項目 年次	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	合計
延暦11	(1)			(1)									(1)		(3)
延暦12													(1)		(1)
延暦13													(1)		(1)
延暦14									(1)				(1)		(2)
延暦15													1		1
延暦19													(1)		(1)
延暦20													(1)		(1)
延暦21													(1)		(1)
延暦22									(1)						(1)
延暦24						1			1						2
大同1				2										2	4
大同3									1				1		2
弘仁2	(1)			1					1	1					3(1)
弘仁4													(1)		(1)
弘仁6													1		1
弘仁7													(1)		(1)
弘仁8													(1)		(1)
弘仁9													(1)		(1)
弘仁10				(1)				(1)	(1)				(2)		(5)
弘仁13													(1)		(1)
弘仁14									(1)				(1)		(2)
天長1				(1)											(1)
天長6									(1)				(1)		(2)
合 計	(2)			3(3)		1		(1)	3(5)	1			3(16)	2	13(27)

〔備考〕 () は日本紀略に拠る。

続日本後紀

項目 年次	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	合計
天長10													2		2
承和 1													1	1	2
承和 3	1							1							2
承和 4		2			1								1		4
承和 5		3					2					1			6
承和 6	2	1													3
承和 7												1	2		3
承和 8		2		1									1		4
承和10	1			2									1	1	5
承和11													1		1
承和12													1	2	3
承和14			1		1	1						2			6
承和15													1		1
嘉祥 2	1												1		2
嘉祥 3			1			1									2
合 計	5	8	2	3	2	2	2	1				4	12	4	45

文徳実録

年次 \ 項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	合計
嘉祥 3			1									1	1		3
仁寿 1	1		1	1		1							2	1	7
仁寿 2		1											2		3
斉衡 1													1		1
斉衡 2		1											1		2
斉衡 3													1		1
天安 1	1												1		2
天安 2	2		2		1	1			2			2	1	2	13
合 計	4	2	4	1	1	2			2			3	10	3	32

三代実録

年次 \ 項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	合計
天安 2			1		1	1			1		1	2	1		8
貞観 1	2			1									2		5
貞観 2			2												2
貞観 3												2	1	1	4
貞観 4												1	1		2
貞観 5			1	3	1							1	1		7
貞観 6	1	1							4	5	3		2		16
貞観 7	1				1				5	4	3		1		15
貞観 8									4	3	4		2		13
貞観 9		1	1	1					2	1	1		2		9
貞観10					(1)				(2)	(2)	(1)		(1)	(1)	(8)
貞観11					2					2	1		2		7

貞観12								1					2		3
貞観13			2		1				3	2	3		3		14
貞観14	1		1	1	2					2		1		1	9
貞観15			5	1						3	3		1		13
貞観16	1		4	3	2			1	1	6	4		2	1	25
貞観17	1	1	1	4	3				5	1	2		1	2	21
貞観18	3		1	1							1		2		8
元慶 1			1						3	1	1		2		8
元慶 2	1		4		3				3	6	4		2		23
元慶 3					2				2	3	1		1	1	10
元慶 4			3						1	3	4	4	1		16
元慶 5				1					2	2	2		2		9
元慶 6			1		3				1	1			2		8
元慶 7	1			2	2					2	2		2		11
元慶 8			5	2	1	3		1	1	2	3	1	2		21
仁和 1	1		4	2	2				2	1	4	1	1		18
仁和 2			2	3	1					1	2	2	2		13
仁和 3	1				1			1				1	1		5
合 計	14	3	39	25	28(1)	4		4	40(2)	51(2)	49(1)	16	44(1)	6(1)	323(8)

〔備考〕 () は日本紀略に拠る。

第二表

項目・ 六国史	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	事例条 O 合計	固有名 P 屋事例	叙述対 Q 象年月	一年当り R 事例条
日本書紀	3 ⑤0.028	6 ④0.057	3 ④0.028	0 0	3 ⑤0.028	3 ⑤0.028	2 ②0.019	1 ⑤0.009	5 ⑤0.047	1 ④0.009	1 ③0.009	1 ⑤0.009	11 ⑥0.104	2 ⑤0.019	42	⑤3条 0.028 ⑤4例 0.038 ⑤3種類0.028	105.7	⑥0.397
続日本紀	2 ⑥0.021	3 ⑤0.032	2 ⑤0.021	6 ⑤0.064	9 ④0.095	6 ④0.064	1 ③0.011	4 ③0.042	29 ②0.307	5 ②0.053	10 ②0.106	3 ④0.032	72 ③0.763	0	152	②29条 0.307 ②34例 0.360 ③8種類0.085	94.4	④1.610
日本後紀	2 ④0.049	0 0	0 0	6 ③0.146	0 0	1 ⑥0.024	0 0	1 ④0.024	8 ④0.194	1 ③0.024	0 0	0 0	19 ⑤0.461	2 ④0.049	40	③6条 0.146 ④7例 0.170 ④3種類0.073	41.2	⑤0.971
続日本後紀	5 ③0.291	8 ①0.465	2 ③0.116	3 ②0.174	2 ③0.116	2 ③0.116	2 ①0.116	1 ②0.058	0 0	0 0	0 0	4 ③0.233	12 ④0.698	4 ③0.233	45	0	17.2	③2.616
文徳実録	4 ②0.471	2 ②0.235	4 ②0.471	1 ④0.118	1 ②0.118	2 ①0.235	0 0	0 0	2 ③0.235	0 0	0 0	3 ②0.353	10 ②1.176	3 ①0.353	32	④1条 0.118 ③2例 0.235 ②2種類0.235	8.5	②3.765
三代実録	14 ①0.481	3 ③0.103	39 ①1.340	25 ①0.859	29 ①0.997	4 ②0.137	0 0	4 ①0.137	42 ①1.443	53 ①1.821	50 ①1.718	16 ①0.550	45 ①1.546	7 ②0.241	331	①36条 1.237 ①43例 1.478 ①23種類0.790	29.1	①11.375
合計	30	22	50	41	44	18	5	11	86	60	61	27	169	18	642			

〔備考〕 事例条の合計(O)とは、A～Nの合計をいう。日本書紀の叙述対象年月は、天武天皇紀の、その元(593)年より同書の撰筆年たる持統11(697)年8月までを算出したものである。A～Nの各事例条数下の数値と、固有名屋事例(P)における各六国史の条・例・種類値の数値及びO印付数字は、各国史における各項目・事項毎の一年当りに載録されている事例条数(A～N及びP・Rの場合)ないしは事例数・種類数(Pの場合)、並びにその卓越順位を各々示すものである。

第三表

R	P 種例条 類数数数	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	項目・事項 順位
三代実録	三代実録 三代実録 三代実録	文徳実録	三代実録	三代実録	三代実録	三代実録	三代実録	三代実録	続日本後紀	文徳実録	三代実録	三代実録	三代実録	続日本後紀	三代実録	1
文徳実録	文徳実録 続日本紀 続日本紀	三代実録	文徳実録	文徳実録	続日本紀	続日本紀	続日本紀	続日本後紀	日本書紀	三代実録	文徳実録	続日本後紀	文徳実録	文徳実録	文徳実録	2
続日本後紀	続日本紀 文徳実録 日本後紀	続日本後紀	続日本紀	続日本後紀	日本書紀	日本後紀	文徳実録	続日本紀	続日本紀	続日本後紀	続日本後紀	日本後紀	続日本後紀	三代実録	続日本後紀	3
続日本紀	日本後紀 日本後紀 文徳実録	日本後紀	続日本後紀	続日本紀	（続日本後紀） （文徳実録）	日本書紀	日本後紀	日本後紀	（文徳実録） （三代実録） （日本後紀）	続日本紀	続日本紀	文徳実録	日本書紀	日本書紀	日本後紀	4
日本後紀	日本書紀 日本書紀 日本書紀	日本書紀	日本後紀	日本書紀		（続日本後紀） （文徳実録）	日本書紀	日本書紀		日本書紀	日本書紀	続日本紀	続日本紀	続日本紀	日本書紀	5
日本書紀	（続日本後紀） （続日本後紀） （続日本後紀）	（続日本紀）	日本書紀	（日本後紀）			（続日本後紀）	（文徳実録）		日本後紀	（日本後紀）	（日本書紀）	（日本後紀）	（日本後紀）	続日本紀	6

〔備考〕（ ）印は事例のないことを示す。

さて、第一表に基拠して作成した第二表によりA、P及びR（A、P、Rが項目）の一四項目・三事項中、B、F、G、Nの四項目を除く一〇項目・三事項の孰れにおいても、『三代実録』は他余の五国史に比して格段に卓越しており、しかも、それはR事項の卓拔さに最も象徴的に示されていると言ってよい。また、同書におけるそれら各卓越項目・事項を除くB、F、G、N四項目のあり様についても、B、G両項目の場合、『続日本後紀』に、F、N両項目の場合、『文徳実録』に次いで各々多くの事例数を有することが分かる。ただ、こうした『三代実録』に、G項目が『日本後紀』『文徳実録』両書の場合同様に全く所見されぬことは旁々注意しておいてよからう。

斯様に天空事象関係諸記事について、これを総体的にみれば、六国史中、『三代実録』が最も卓越していることを知りうるが、ここではこうした同書の、他余の五国史に比してより卓越する先記一〇項目とO、P、R三事項のうち、とくにその内容において具体性をもつ件の一〇項目（但し、M項目との関係から、参考の資としてN項目をも追記しておく。）並びにP事項に関わる諸記事につき、他余の五国史におけるそれと比較対照しつつ個分的にやや詳しく検討を加えてみようと思う（以下の各項目・各事項関係諸記事における数字は、先掲の当該関係諸記事列記番号を示す）。

A項目記事について……異雲・雲氣・異光などを記すに具体的な色彩名を以てする事例を検するに、

『日本書紀』……………1（赤）、16、22（白）の三例中二例（約六七％）。

『続日本紀』……………119（白）、157の二例中一例（五〇％）。

『日本後紀』……………163（白）、181の二例中一例（五〇％）。

『続日本後紀』……………204、215、216（赤）、225（黒）、238の五例中二例（四〇％）。

『文徳実録』……………246、257（白）、264（白）、265の四例中二例（五〇％）。

『三代実録』……………273（赤黄白）、276（赤）、296（赤）、302（赤）、340（白）、356（黒染紗）、370、380（黒）、381（赤）、383（白）、396、428（白）、449（青）、471の一四例中一一例（約七八％）。

という具合であり、仍って『三代実録』が六国史中、A項目記事を誌すに具体的色彩名を以てする事例率において格段に高いことを知りうる。

C項目記事について……………流星出現の刻限についての記述を検するに、

『日本書紀』……………6、21〈昏時〉、25〈昏時〉。

『続日本紀』……………87〈夜〉、146〈夜〉。

『日本後紀』……………ナシ。

『続日本後紀』……………235〈人定之時〉、239。

『文徳実録』……………240〈夜〉、243〈夜〉、261〈夜〉、263〈夜〉。

『三代実録』……………271〈夜〉、277〈夜〉、278〈夜〉、287〈暁〉、315〈晝〉、334〈夜〉、336〈夜〉、339〈晝〉、345、

346〈夜〉、347、350〈酉時〉、351〈夜〉、353〈夜〉、358〈酉時〉、359〈酉時〉、361〈夜〉、372（

辰時）、382〈寅時〉、385〈晡時〉、392〈亥時〉、394〈夜〉、395〈夜〉、396〈暁〉、412〈寅時〉、

413〈寅時〉、414〈夜〉、426〈夜〉、437〈夜〉、439〈夜〉、442〈自戌至子〉、443〈自日没

至人定〉……………自人定至于夜分〉、444〈寅時〉、450〈夜〉、452〈酉時〉、454〈夜〉、455（

夜〉、462〈夜〉、464〈夜〉。

という具合であり、このうち、その具体的な刻限を記す事例（右掲中の印事例）が『三代実録』のみに多見されるのは、C項目

記事の事例数そのものが、六国史中、同書に最も多く所見されることを念慮すれば、寧ろ当然のこととさえ考えられよう。さらに同書には、そうした事例ばかりでなく、他余の五国史には全く見られぬところの、その刻限が午前零時以降及び昼時に互る事例（右掲中の傍線事例）や、その事象の継続ないし持続時間を誌す事例（右掲中の傍波線事例）やをかなり多見しうるのである。これは、そうした事柄に関わる記述の精細、且つ精確さ、中に就き、その観測・観察時間の長さや詳しさの点において、同書における当該関係記事が他余の五国史におけるその追隨を許さぬことを明示するものである。

ところで、その流星なる事象を具体的色彩名を以て記す事例について検するに、『日本書紀』『日本後紀』両書には事例なし、『続日本紀』には赤（87）の一例（同書全二例中の五〇％）あり、『続日本後紀』には赤青（239）の一例（同書全二例中の五〇％）あり、『文徳実録』には青赤（263）の一例（同書全四例中の二五％）あり、そして『三代実録』には赤白・白（334）、青（336）、白（345）、赤（346）、赤（347）、青白（350）、赤（353）、赤（358）、黄白（359）、赤（361）、純白（372）、赤（392）、白（394）、赤（395）、赤（414）、青白（437）、白（439）、黄白（450）、赤白（455）、青（462）、青（464）の二二例（同書全三九例中の約五四％）あるように、この点でも同書は、六国史中最も卓抜しており、とくに同書には、他余の国史に所見される青、赤はもとよりのこと、他余の国史には所見されぬ黄、白、純白などという色彩名も所見されるのである。また、その流移方位・位置に関する記述を検してみるに、『日本書紀』には「從東流西」（6）、「自東度西」（21）、「流東北」（25）とあり、『続日本紀』『日本後紀』両書には事例なく、『続日本後紀』には「自西殞東」（235）、「経天落東」（239）とあり、『文徳実録』には「経天西落」（263）とあり、『三代実録』には「自東南行西北」（271）、「出自東北入於西南」（277）、「出自南方入於西北」（278）、「西行」（287）、「東南行」（315）、「出東方入天市中」（334）、「出東南入女林」（336）、「從七星辺入弧」（345）、「入女林」。亦入天市」（346）、「入翼」（347）、「入参南辺」（350）、「出自妻与天倉間入奎南辺」（351）、「入犯太微左執法第二星」（353）、「出自織女西辺入大陵卷舌間」（358）、「出自室入登地」（359）、「出自七星入張」（361）、

「落[◎]於東南[△]」(372)、「出[△]自[△]太微東番星[△]」抵[△]大陵星[△]。入[△]閣道[△]与[△]附路星[△]之間[△]」(382)、「出[△]自[△]天中庚[△]指[△]天中良[△]而
行[△]……出[△]天津[△]邊[△]入[△]紫微宮[△]中[△]」(385)、「出[△]自[△]氏南[△]入[△]軫翼[△]間[△]」(392)、「出[△]自[△]斗[△]邊[△]入[△]箕星[△]下[△]」(394)、「出[△]自[△]騰地[△]
入[△]雷電星[△]」(395)、「南[○]行[△]」(396)、「出[△]自[△]角亢[△]間[△]入[△]梗河星[△]」(412)、「出[△]自[△]角亢[△]間[△]入[△]梗河星[△]」(413)、「自[○]東方[○]来[△]
入[△]弧星[△]」(414)、「向[◎]西北[◎]行[△]」(426)、「出[△]自[△]北斗[△]。犯[△]紫微宮[△]西蕃第五星[△]」(437)、「出[△]自[△]北極大星[△]入[△]三公星[△]」(439)、「
四方[△]」(442)、「東西南北[○]分散[○]行[△]……或出[△]入[△]紫微宮[△]。犯[△]衆星[△]宮[△]。或出[△]入[△]北斗[△]貫[△]索[△]。陵[△]内外[△]宿[△]」(443)、「自[◎]東南[◎]
行[△]西北[◎]」(444)、「自[○]南方[○]来[△]入[△]五車[△]中[△]」(450)、「自[○]西海[○]行[△]東北[◎]」(452)、「出[△]自[△]心前星[△]。貫[△]心大星[△]入[△]天江[△]」(454)、「
出[△]自[△]天中甲[△]。指[△]天中丙[△]……出[△]自[△]紫微宮[△]入[△]天市垣[△]中[△]」(455)、「出[△]自[△]鉤陳[△]歷[△]内階[△]入[△]文昌第二星[△]間[△]」(462)、「
出[△]從[△]大陵[△]以抵[△]傳舍[△]入[△]華蓋[△]」(464)とあって、『三代実録』では、他余の五国史に相違して傍○印の四方位(278 287 334
396 414 443 450 452の八例)よりも傍◎印の八方位(271 277 278 315 336 372 426 444 452の九例)を以て記述している事例の方が若干ながらも多
いこと。星団・星群・星域を記すK項目記事(傍△印)と、二十八宿を記すJ項目記事(傍▲印)とが、ここで問題とし
ている流星記事に見られるのは、六国史中、独り『三代実録』のみであり、しかも前者の記事は334(貞観13・2313条)以降に、
後者の記事は347(貞観15・4・2615条)以降に各々見られること、等が知られる。このように流星記事について、その流れ行く方位・
位置の記述の詳密さ・詳審さに関しても、『三代実録』は他余の五国史に比して格段に卓出しており、これは、とくに貞
観十三年以降の記述において、より顕著であることを認めうるのである。

D項目記事について……日輪に関する異常・異変が現われる時、あるいはそうした状態に在る時の刻限を記述する事
例に関して、『三代実録』以外の五国史を検するに、『続日本紀』『文徳実録』両書に見られず、『日本後紀』に「巳時」(196)、
『続日本後紀』に「午刻」(226)と各一例ずつ見られるのみである。これに対し『三代実録』には、「自[△]十六日[△]至[△]十八
日[△]」(285)、「自[△]午[△]至[△]未[△]乃復[△]」(348)、「時加[△]辰[△]」(349)、「時加[△]未[△]」(354)、「申時[△]」(355)、「巳時[△]」(365)、「酉時[△]」(366)、「午

時」(419)、「申時」(430)、「申時」(431)、「自辰至巳」(436)、「自未至申」(447)、「酉時」(448)、「申時」(457)、「辰時」(458)、「辰時」(459)と多数見られる。つまり『三代実録』では、他余の五国史に比して日輪に関する異常・異変が何時勃発し、またそれが何時まで継続したか、その刻限を記すにかなり意を用いていることが知られるのである。

ところで、この日輪に関する異常・異変の内容・実態についてであるが、『日本書紀』には該当記述なし、『続日本紀』には「暈……有珥」(65)、「白氣貫日」(119)、「日上有五色雲」(128)、「有虹繞日」(138・156)、「有光挾日」……日上有光」(157)とあり、『日本後紀』には「白氣貫日」(163)、「日赤無光」(177・178)、「日抱翼」(183)、「有虹貫日」(189)、「日無色。輪暈兩傍小有光」(196)とあり、『続日本後紀』には「日色赤如血」(221)、「日赤無光……時々日見。其色黃赤」(225)、「日色明潔」(226)とあり、『文徳実録』には「日無精光。中有黒点」(248)とあり、そして『三代実録』には「有赤黃白氣……繞日」(273)、「白無光」(285)、「無光」(289・290)、「日上有冠。左右成珥。色黃白」(318)、「日赤無光。即日宿在氏」(343)、「日重暈。左右有珥。其下雲氣如龍」(349)、「日有五重暈。白虹貫日。即日在胃宿」(354)、「日赤無光」(355)、「日在畢宿……片雲……掩日」(356)、「日暈」(365)、「日暈而有珥」(366)、「日有冠纓宿奎」(367)、「日少光」(373)、「日色變赤」(378)、「日有三重暈。内黒外赤」(419)、「日右有珥。上下有白雲。日即宿翼」(430)、「日左右有珥。其下雲氣。形如龍馬」(431)、「日有冠。右有珥。色黃。左有白虹向日」(435)、「日有冠。左右有珥。色白。即日宿危」(436)、「日上有背向外」(447)、「日色變黒。光散如射」(448)、「日右有珥」(457)、「日上有冠左右成珥」(458)、「日有冠纓」(459)とあって、『三代実録』の日輪異常・異常記事は、単に多くの当該事例数を有するのみならず、特色あり、且つ同書独有のものが認められる。即ち『三代実録』には暈¹(354・365・366・419・430の五例)、珥²(318・366・430・431・435・436・457・458の八例)の事例や、日輪が二十八宿(事例[▲]印)に在ることを記す事例(343・354・356・367・430・436・459の七例)が他余の五国史に比して特段に多く(計二例、前者^{傍1}は『続日本紀』に一例(65)、『日本後紀』に一例(196)の前者^{傍2}は『続日本紀』に一例(65)、後者は『日本後

『紀』に一例(183)、取り分け、重量(349 354 419)、日輪の左右(318 349 431 436 458)・右(430 435 457)・左(435)、並びに冠(纓)(318 367 435 458)なる表現事例は、六国史中、独り同書にのみ存するのである。

E項目記事について……月面の色彩名を具体的に記述する事例は、六国史中、『三代実録』のみに見られ、それを示せば、「黒色」……「赤如血」(269)、「赤如丹」(285)、「正黄」(302)、「片黒如聚墨」(341)、「黒」(460)、「白暈氣」(467)のごとくである。

ところで、件のE項目記事について、この中に、月の恒星や惑星への奄犯・行奄、即ち月の恒星や惑星への影響ないし作用や、月の二十八宿を始めとする諸種の天域・星群への行犯、即ち月の天球上における運行状態やを主体とした観察結果による記述様態(以下、これをA記述と仮称する。)と、恒星・惑星・彗星等の月掩蔽、合又は接近、即ち恒星・惑星・彗星等の月への影響ないし作用を主体とした観察結果による記述様態(以下、これをB記述と仮称する。)とが各々、各六国史に如何ように所見されるかを調査吟味してみると、『日本書紀』には、A記述はなく、B記述は9 10 19の三例ある。『続日本紀』には、A記述は71 72 76 81 89 110 111の七例あり、B記述は60 104の二例ある。『日本後紀』『続日本後紀』両書には、A B両記述ともない。『文徳実録』には、A記述はなく、B記述は262の一例あるのみである。そして『三代実録』には、A記述は320 325 326 333 342 362 363 399 400 401 405 407 422 424 428 433 438 451の一八例あるのに対し、B記述は425 446の僅か二例しかない、といった具合である。これにより六国史全体を通してみると、A B両記述のうち、A記述の方が、B記述よりも遙かに多くの事例数を有し、そして、こうしたA記述は、『続日本紀』『三代実録』両書(前書に七例、後書に一八例)のみにしか見られぬことが分かる。これは、E項目記事に関して、月を主体とする天体観測結果が、国史の一編纂資料として供用され、それが国史に採録されるに際し、まず『続日本紀』で試みられ、やがて『三代実録』に至ってより徹底した形で行われたことを想察せしめよう。しかしてこのことは、先述したように、月面の色彩名までを具体的に記述する事例が、六国史中、『三代実録』にしか見られぬ点や、後述するよ

うに、月輪に異変・異常が勃発し、あるいはそれが継続した刻限を明記する事例が、六国史中、やはり『三代実録』のみに「寅時」(399)、「卯時」(400)、「寅時」(446)、「自子至丑」……寅時」(460)、「始自戌一尅」……至于亥時」(467)としか見られぬ点からも言い得られよう。

なお、先にD項目記事について述べたところで、それに関わる「冠纓」や、日輪の部位的指示語の「左」や「右」が所見されるのは、六国史中、独り『三代実録』のみであるとしたが、この月輪の場合についても、それら「冠纓」「左」「右」なる語が見られるのは、六国史中、やはり『三代実録』(467の一例)のみである。このことも亦、旁々注意しておいてよからう。

H項目記事について……六国史中、『三代実録』が一応最も多くの事例数を有するとはいえ、この事例数そのものは決して多くないので、記述上における同書独有ともいうべき特色を指摘し難い。

I項目記事について……六国史中、具体的固有名、即ち具名不明の星の運行状況を記す事例は、『日本書紀』に一例(27)、『続日本紀』に三例(75 113 124)、『日本後紀』に一例(194)、『続日本後紀』に皆無、『文徳実録』に一例(262)、そして『三代実録』に一八例(268 293 294 295 299 300 303 304 305 306 309 311 323 337 371 418 420 436)見られる。これにより件の事例が『三代実録』に如何に多いかがよく分かる。そしてこの『三代実録』所見の一八事例のうち、○印付加の一五事例には、そうした星の出处及び入処の双方が併記されており、しかも、こうした精確詳密な記述は、他余の五国史に全く見られぬので、これを同書独有のものの一つとして挙げるのできるのである。

さて、このI項目記事に関して、当該記事所見条に登場する星辰のうち、具名を有つものをば、(一)恒星(但し、太陽)と、(二)それ以外の惑星・衛星、等(但し、太陰)に分ちて、これら(一)(二)が各六国史に各々如何ように所見されるかというに、まず(一)については、『日本書紀』『続日本後紀』両書に皆無、『続日本紀』に太微左執法(70)の一例一種、『日本後紀』に

老人星(173)の一例一種、『文徳実録』に牽牛(266)の一例一種、そして『三代実録』に土司空(305)、織女(306)、大角(311)、文昌第二三星(337)、太陽守星(337)、太微左執法(388 404 451)、心中央星(420)の九例七種、都合一一例九種であり、(二)については、『日本書紀』に熒惑(19 29)の二例、客星(10)の一例、歳星(29)の一例、の計四例三種、『続日本紀』に太白(68 69 77 78 80 85 86 92 97 101 104 148 153 154 159 160)の一六例、熒惑(63 70 74 82 88 91 96)の七例、歳星(69 78)の二例、客星(67)の一例、填星(80)の一例、辰星(101)の一例、の計二八例六種、『日本後紀』に太白(168 175 180 191 197)の五例、鎮星(175)の一例、の計六例二種、『続日本後紀』に皆無、『文徳実録』に歳星(266)の一例、の計一例一種、そして『三代実録』に太白(314 331 338 369 389 398 451)の七例、熒惑(297 393 404 406 411 432)の六例、歳星(322 388 389 425)の四例、宮頭(307)の一例、客星(386)の一例、填星(446)の一例、の計二〇例六種、都合五九例七種である。

これによって、六国史全体からすれば、(一)(二)双方の事例数と種類数のうち、種類数では、(一)の方が(二)よりもやや多いものの、事例数では、逆に(二)の方が(一)よりも圧倒的に多いことを知りうる。これは、観測者をして、それら(一)(二)についての異変・異常事象を察知せしめ易くする条件、たとえば、その観測者とそれら(一)(二)との空間距離の問題や、それら(一)(二)の各々に有する光輝の度合や、(一)の静止体と(二)の運動体との関係、さらには観測者に識認可能な星辰数それ自体の卓絶性、等々といった事柄を併考するならば、寧ろ自然な様態と見做してよからう。六国史に所見されるところの、そうした(二)の事例数において、太白(計二八例)↓熒惑(計一五例)↓歳星(計八例)なる順次を確認しうることにしても、そうした見方の妥当性の一端が証せられるように思うからである。それにまた、(一)(二)双方のうち、取り分け(二)について、六国史中、多くの事例数と種類数とを有するのは、『続日本紀』『三代実録』両書であるが、これら両書につき、件の(二)に関してみれば、種類数ではそれら両書とも同じであるが、事例数では『続日本紀』の方が『三代実録』よりもかなり多いことから総合的に判断すれば、その記述面における卓越度は『続日本紀』の方が『三代実録』よりも高いと言えよう。一方、(一)に関

してみれば、種類数のみならず事例数までも、『三代実録』の方が『続日本紀』よりも圧倒的に多いことから、その記述面における卓越度は『三代実録』の方が『続日本紀』よりも数段高いと理合できる。これは、天体観測に関する記述面において、『三代実録』が『続日本紀』に比してより広域空間に及び、しかも、一段と緻密さ・精確さを加えていることを示すものであろう。しかしてこうした事柄は、後述するように、『三代実録』における二十八宿記事（J項目）や、星団・星群・星域記事（K項目）が、『続日本紀』における同種記事に較べて、その事例数と種類数とを著しく増していることから、是認せられよう。

J項目記事について……六国史所見の当該記事の全事例を示すと左記の通りである。

『日本書紀』……………昴（27）、の一種一例。

『続日本紀』……………房（71）、心（81）、東井（井）（82 89 97）、斗（133）、の四種六例。

『日本後紀』……………翼（183）、の一種一例。

『続日本後紀』……………ナシ。

『文徳実録』……………ナシ。

『三代実録』……………宮室（室）（291 293 307 359）、昴（294 362）、奎（295 305 309 351 367 459）、婁（295 305 351）、弓（297 320 343 392 399 405 406）

407）、東井（井）（300）、軫（300 314 392）、大畢（畢）（303 311 356 401 422）、須女（女）（304）、大角（

角）（311 412 413）、房（322 400 411 418 432 438）、心（325 333 420 454 454）、斗（326 394 437 443）、危（338 436）、箕（342

394 398）、翼（347 392 430）、参（350）、胃（354）、張（361）、辟（386）、輿鬼（鬼）（363）、亢（412 413）、

の二三種六六例。

これにより、J項目記事の種類数・事例数の孰れにおいても、『三代実録』は他余の五国史を遙かに圧倒しており、ま

た、その種類において、他余の五国史所見のJ項目記事の全てが『三代実録』に所見されることも知られる。それにまた、このJ項目記事が一条に二種類以上所見されるのも、六国史中、独り『三代実録』あるのみであり、実にこうした記述が295 300 305 311 351 392 394 412 413 454の一〇条に亘って見られ、中には392のように、一条中に三種類所見される例もある。以て如何に件の記事が『三代実録』に卓越しているかが認知せられよう。

なお、ここに取り上げているJ項目記事が、後述するK項目記事とともに、同一条に所見されるのも、六国史中、やはり『三代実録』あるのみなのであり、それが同書には、293 294 295 303 304 307 309 311 326 351 361 362 394 400 411 412 413 418 420 437 443 454の二二条も見られるのである。

K項目記事について……六国史所見の当該記事の全事例を示すと左記の如くである。

『日本書紀』……………昴星(27)、の一種一例。

『続日本紀』……………閣道(67)、房星(71)、華蓋(75)、東井西亭(82)、太微中(88 92)、軒轅(96)、北斗(133)の七種八例。

『日本後紀』……………ナシ。

『続日本後紀』……………ナシ。

『文徳実録』……………ナシ。

『三代実録』……………紫微宮(268 294 307 317 323 337 385 443 455)、羽林東(293)、外屏(295)、天苑(299)、常陳(299)、卷舌(303 358)、墳墓(304)、女林(306 336 346)、大陵(星)(309 358 382 464)、摄提(311)、内階(317 462)、軒轅(星)(323 369 433)、南斗魁(326)、天市(垣)(334 346 418 455)、文昌(星)(337 352 462)、七星(345 361)、弧(星)(345 414)、天倉(351)、昴星(362)、五車(368 450)、八穀星(368)、少微(369)、太微東蕃

星(382)、閣道(382)、天津(385)、天江(393 454)、箕星(394)、騰蛇(395)、雷電星(395)、房星(400)、鈎鈴星(400)、太微左掖門(404 451)、房上相(411)、梗河星(412 413)、列肆星(420)、太微西蕃(428)、北斗(443)、貫索(443)、紫微宮西蕃(437)、三公星(439)、衆星宮(443)、太微右掖門(451)、鈎陳(462)、傳舍(464)、華蓋(464)、の四五種七三例。

これにより、六国史所見の当該記事は、『日本書紀』に一種一例、『続日本紀』に七種八例、『三代実録』に四五種七三例あり、そして、この『三代実録』所見の四五種七三例中には、『日本書紀』『続日本紀』両書所見の八種九例から、『続日本紀』所見の「東井西亭」(82)〈傍波線部分〉なる一種一例を除いた七種八例の全てが包含されている(部分)ことを知りうる。従って、『三代実録』所見の四五種七三例から、そうした他余の国史所見の六種八例(昂星・閣道・房星・北斗・華蓋の各一例及び軒轅三例、の計六種八例)を差し引くとともに、『続日本紀』所見の「太微中」に対応する太微東蕃星・太微西蕃・太微右掖門の各一種一例及び太微左掖門の一種二例、の計四種五例を加えた都合四三種七〇例が、実に同書独有の当該記事ということになる。これを以て『三代実録』における当該K項目記事が、他余の国史におけるそれに較べて如何に豊富なもの、別言すれば、如何に緻密・精確化されているものであるかをよく理会しうるのである。

「項目記事について……当該記事に関しては、さして述べ立てる程のこともないが、ここでは以下の一点だけを指摘するにとどめておく。それは、六国史中、当該記事事例数の最も卓越する『三代実録』には、「卯時」(409)、「戌時」(415)、「戌一刻」(416)、「辰時」(441)、「巳時」(456)、「自亥至子……寅時」(465)のように、「有_レ声」に至った、あるいはそうした状態に在った刻限を誌す事例が所見され、しかも、これが他余の五国史には全く所見されぬことである。

M項目記事について……各六国史毎の一年当りに載録する当該記事は、既掲第二表に示した如く『三代実録』が一・五四六例と最も多く、以下『文徳実録』(一・一七六例)、『続日本紀』(〇・七六三例)、『続日本後紀』(〇・六九八例)、

『日本後紀』(〇・四六一例)、『日本書紀』(〇・一〇四例)の順に続いている。このうち、一年当りの当該記事載録事例数の最も少ない『日本書紀』の、その全一一事例の在り方などにつき検討すると、

推古紀→天武紀……………約九五年間に五例(一年当り約〇・〇五例)

持統紀……………約一〇年間に六例(一年当り約〇・六例)

のように、同書に存する全事例の半数以上が持統紀に集中し、また、当該記事の各一年当りに載録する事例数の面でも、持統紀は、それ以前の推古紀→天武紀の約一二倍にも達する。以て同書における持統紀の、当該記事載録件数の卓越さが知られるのである。同書において件のM項目記事を一年間に二件載録するのは、持統紀の七年(三月一日、九月一日の両条)と八年(三月一日、九月一日の両条)のみに限られていることに、そうした持統紀における卓越性を齎している因由の一斑を求めうるのである。

つぎに『三代実録』『文徳実録』両書に次いで件の記事を多有する『続日本紀』の場合についてみるに、同書における当該記事にあっては、一年当り二件というのが最も多い載録件数であり、こうした載録件数を有する年次は、①文武天皇二年、②慶雲三年、③同四年、④和銅二年、⑤同三年、⑥同四年、⑦靈龜元年、⑧神護景雲二年、の八ヶ年に限られている。そして、これら①→⑧のうち、⑦以前の七ヶ年は、同書の前半部分(卷一文武天皇元年八月紀→卷二孝謙天皇天平宝字二年七月紀)、中に就き、文武天皇二年から靈龜元年までの間に、⑧の一ヶ年は、同書の後半部分(卷二一淳仁天皇天平宝字二年八月紀→卷四〇桓武天皇延暦二〇年二月紀)に各々包含されている。これをさらに同書の起筆年たる文武天皇元年と、上記の靈龜元年と、同書にあって各々奉勅撰者を異にする前半・後半両部分の境目たる天平宝字二年という各々の時期を区分点として、

前半部分

文武天皇元年八月() 靈龜元年二月……………約一八・四年間に二二例(一年当り約一・一四例)
靈龜二年一月() 天平宝字二年七月……………約四二・六年間に二九例(一年当り約〇・六八例)

一年当り約〇・八二例

後半部分 天平宝字二年八月～延暦一〇年二月……約三三・四年間に二三例（一年当り約〇・六六例）

のように区切り、同書における件の記事のあり方について聊か考えてみるに、一年当りの当該記事載録事例数は、天平宝字二年八月～延暦一〇年一二月の約三三・四年間におけるよりも、靈龜二年一月～天平宝字二年七月の約四二・六年間における方が極めて僅か乍らも多く、さらにこの後者の期間におけるよりも、文武天皇元年八月～靈龜元年一二月の約一八・四年間における方が約一・七倍も多いこと、即ち右のような区分けで考えると、同書における当該記事は、文武天皇元年八月～靈龜元年一二月の約一八・四年間により多く偏在していることになる。そしてこのことと、当該記事が『日本書紀』にあつては持統紀、取り分け、その七年紀以降により多く集中していると先に指摘したことを併考するならば、『日本書紀』『続日本紀』両書においては、当該記事、即ちM項目記事が持統七年紀から靈龜元年紀にかけての年次により多く所見されることが知られるのである。これは、単にその期間に当該記事の叙述対象とする事柄、即ち日蝕なる天体事象そのものが頻々と生起し、そしてこれを忠実に記録したことに因るものというよりも、一般的には、日蝕が凶兆以外の何ものでもない、と受け止められていたことよりして、某かの深刻で暗いイメージの漂う政治的諸情勢、あるいは事件・出来事が存在し、そしてそれが微妙に反映されていることに因るものと解すべきであろう。こうした事柄は、同書の完成奏上時の帝であり、また、同書編纂事業の主宰者でもあつた桓武天皇の治政下たる延暦年間に当該記事が僅々三例しか載録されていなかったことから推量しえよう。

さらに、『日本後紀』『続日本後紀』『文徳実録』三書における件の記事のあり様についてみるに、これに関しては、然して問題とすべき点を見出しえないが、ただ、ここでは以下の事柄を指摘しておこう。即ち、それら三書における当該記事は、一年当り二件というのが、その載録件数の最も多い場合であること。そしてそれが、

『日本後紀』……弘仁一〇年（六月一日、二月一日の両条。）の一例あるのみ。

『続日本後紀』……………天長一〇年（三月一日、八月二日の両条）、承和七年（四月一日、一〇月二日の両条）の二例あるのみ。

『文徳実録』……………仁寿元年（三月一日、九月二日の両条）、仁寿二年（三月一日、閏八月一日の両条）の二例あるのみ。

と見られるのみであること。

最後に『三代実録』における件の記事のあり様についてみるに、同書には、その叙述対象とする二九・一年間に当該記事を一年当り二件ないし三件載録する事例が貞観元年（四月一日、一〇月一日の両条二件）、同六年（七月一日、十二月三〇日の両条二件）、同八年（五月一日、二月一日の両条二件）、同九年（五月一日、十一月一日の両条二件）、同十一年（三月一日、九月一日の両条二件）、同十二年（三月一日、九月一日の両条二件）、同十三年（三月一日、閏八月一日、二月三日の三條三件）、同十六年（六月一日、十二月一日の両条二件）、同十八年（五月一日、十一月一日の両条二件）、元慶元年（四月一日、一〇月一日の両条二件）、同二年（四月一日、九月三〇日の両条二件）、同五年（二月一日、八月二日の両条二件）、同六年（閏七月一日、十二月一日の両条二件）、同七年（六月一日、十二月一日の両条二件）、同八年（六月一日、十二月一日の両条二件）、仁和二一年（五月一日、一〇月一日の両条二件）の如く一六年次にも互って見られ、しかも、この年次から知られるように、独り貞観一三年の一年当り三件の一例を除けば、これといった年次的偏在は認められない。斯様な事柄が、同書をして六国史中、当該記事の一年当り載録件数を最も多からしめている所以なのである。それに同書の当該記事が、単にそうした一年当りの載録件数においてのみ、六国史中最も卓越しているということだけではなく、「日蝕無光。虧辰如三月初生。自午至未乃復」（348）、「夜丑三刻。日有蝕之」（376）、「夜丑一刻。日有蝕之。虧初子三刻三分。復至寅二刻一分。皇帝不視事。百官不理務。不举常祭」（387）、「夜時加戌四刻一分。日蝕十五分之十三半強」（397）とある如く、虧初の、ないしは虧初から復末に至るまでの刻限・時間や、時々刻々の状態・状況、さらには件の日蝕なる天空事象の政治・祭祀への影響、等といった他余の五国史では決して見ることでできぬ、事実上忠実な記事内容をも有しているのである。そしてこうした同書独有ともいべき記事が、貞観一五年紀以降において断続的に所見されることも亦、旁々注意しておきたい点である。

N項目記事について……………この月蝕記事の一年当りの載録事例数が、六国史中、最も多いのは『文徳実録』であり、以

下、『三代実録』↓『続日本後紀』↓『日本後紀』↓『日本書紀』↓『続日本紀』の順に続いている。六国史全体を通して件の月蝕記事は、その載録事例数において、先に触れた日蝕記事の18/169(約一〇・七%)に過ぎず、その記事内容においても、『続日本後紀』に「丑刻。月輪半虧。質明稍滿」(229)とあり、『三代実録』に「夜月虧。細如三月初生魄」(321)、「西初。月有蝕之。至戊復本。輪下片黑如聚墨」(341)、「西時。月有蝕之」(364)とある如く、有蝕・復本の刻限や、有蝕時の状態・状況やを比較的簡短に記すのみであり、こうした記事が、当該N項目記事の一年当りの載録件数において、六国史中、最も卓越する『文徳実録』には全く見られないのである。また、『日本書紀』には、日蝕記事が持つ統紀に多見されることを先に指摘したが、件の月蝕記事が皇極紀に一例(11)、天武紀に一例(17)、の計二例というように、天武紀以前に所見され、持統紀に全く所見されぬことや、『続日本紀』には、日蝕記事がかなり多見されると先に指摘したが、件の月蝕記事が全く所見されぬこと、等も亦、看過しえぬ点であろう。

四

最後に、P事項、即ち固有名星事例に関わる事柄を述べて本稿の結尾としたい。

各六国史における固有名星の一年当りに載録する条・例・種の各件数を検してみるに、条については、『三代実録』が最も多く(一・二〇三条)、以下、『続日本紀』(〇・三〇七条)↓『日本後紀』(〇・一四六条)↓『文徳実録』(〇・一八条)↓『日本書紀』(〇・〇二八条)↓『続日本後紀』(〇条)の順に続いている。例については、『三代実録』が最も多く(一・四四三例)、以下、『続日本紀』(〇・三六〇例)↓『文徳実録』(〇・二三五例)↓『日本後紀』(〇・一七〇例)↓『日本書紀』(〇・〇三八例)↓『続日本後紀』(〇例)の順に続いている。種については、『三代実録』が最も多く(〇・七九〇種)、以下、『文徳実録』(〇・二三五種)↓『続日本紀』(〇・〇八五種)↓『日本後紀』(〇・〇七三

種) ↓『日本書紀』(〇・〇二八種) ↓『続日本後紀』(〇種) の順に続いている。これによって、固有名星の一年当りに載録する条・例・種の孰れの件数においても、六国史中、『三代実録』が他余の五国史に比して格段に卓越していることを知りうる。これに対して固有名星が一例も所見されぬ『続日本後紀』を除けば、『日本書紀』が条・例・種の孰れの件数においても、最も少ないことを理會しうる。そしてこうした各国史所載の固有名星中、各国史独有のそれについてみるに、『三代実録』以外の五国史においては、『日本書紀』『続日本後紀』『文徳実録』三書に皆無、『続日本紀』に辰星(101)の一種、『日本後紀』に老人星(173)の一種、の計二種あるのみであるが、『三代実録』には、土司空(305)、織女(306 358)、大角(311)、心前星(325 333)、文昌第二第三星(337)、太陽守星(337)、太微左執法第二星(353)、附路星(382)、心中央星(420)、畢大星(422)、牽牛第二二星(424)、太微西蕃上將軍(428)、紫微宮西蕃第五星(437)、北極大星(439)、文昌第二二星(462)、の一五種もある。これを以て『三代実録』は、他余の五国史に比して如何に多くの同書独有の固有名星を有しているかが分かる。

ところで、各六国史所載の固有名星中、『三代実録』以外の五国史に載録する恒星は、『続日本紀』の太微左執法(70)、心大星(81)の二種、『日本後紀』の老人星(173)の一種、『文徳実録』の牽牛(266)の一種、の計四種のみであるが、『三代実録』所載の恒星は、上記の同書独有の固有名星一五種に、心大星(333 454)、太微左執法(388 404 451)の二種を加えた合計一七種の多きを数える。

とまれ、こうして『三代実録』に多見される同書独有の固有名星は、その全てが恒星であり、これによって同書の恒星載録事例数が、六国史中、最も卓絶したものとなっていることをよく理會しうるのである。しかしてこれは、先にJ・K両項目記事などに関説したところと同様に、同書の当該事項に関わる記事が、他余の五国史のそれに比して、より一層精密にして精確なる天体観測に基拠するものであることを示していよう。こうした恒星関係記事は固よりのこと、本稿で触

れた汎く天空事象一般に関わる諸記事の殆どが、陰陽寮の司天官たちを主とする人々による天体観測と、その忠実なる記録資料とに拠っており、しかもそこには、多分に天体運行の順逆を以て帝王、即ち天皇の執り行う政の善悪・成否を判定標示するという、勝れて現実的な観念が色濃く反映されているといえる。この意味において、叙上の汎く天空事象諸記事一般を通じて、六国史中、その量・質両面で最も卓越するところの『三代実録』のみに見る、その史書としての記載体例を明示するとともに、同書序文に「灾異天之所_レ誠_二於人主_一」とある事柄に密接に関わり、しかも、その一つの具体的表現ともいえる「陰陽寮奏言。夜有_レ星入_二紫微宮_一。赤如_二炎火_一。長十余丈。凡天文風雲。氣色有_レ異。陰陽頭及天文博士密封奏聞。修国史局召_二陰陽寮_一。索_二其案文_一。記_二載史書_一。他皆效_レ此。」(天安₂・8・29条)なる記事自体のもつ意義が、ここに改めて考覈し直されねばならぬであろう。